

論文審査の要旨

| | | | |
|---|----------------|----|------------------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (教育学) | 氏名 | SHEKARABI ZEINAB |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第①・2項該当 | | |
| 論文題目 第二言語としての日本語のアカデミック・ライティングにおけるプランニング・ストラテジーとクリティカル・シンキングの効果の検証 | | | |
| 論文審査担当者 主 査 畑佐 由紀子 審査委員 松見 法男 審査委員 柳瀬 陽介 | | | |
| 〔論文審査の要旨〕 本論文では、第二言語としての日本語におけるアカデミック・ライティングの効果を上げる指導法とその要因を探ることを目的とした。 先行研究では、プランニング・ストラテジーとクリティカル・シンキング（以下 CT）がアカデミック・ライティングの質に影響するという指摘がなされている。しかし、プランニング・ストラテジーを対象とする研究は文章の産出時間、学習者の習熟度やトピック、母語など研究によって異なり、一貫した結果が得られているわけではない。また、執筆前、文章化、推敲のどの段階でストラテジーを指導すべきかについては検討がなされていない。さらに、これまでの研究では、CT 技能は論証と同義に扱われ、CT 技能に含まれる解釈、分析、評価、推論、説明、自己規制といった構成要素を対象とした研究はない。加えて、作文の質の指標も包括的評価を用いることが多く、アカデミック・ライティングの評価に重要であるといわれる文章の一貫性、構成、内容などを評価の指標とはしていない。 そこで、本論文では、内容、構成、一貫性、総合評価という4つの評価指標を用い、プランニング・ストラテジーと CT がアカデミック・ライティングの質に及ぼす影響を検討した。また、文章執筆前と文章化の段階では効果的な指導法が異なる可能性もあるため、通常のアカデミック・ライティング指導、CT 指導をこの2つの段階で行い、指導効果を比較した。さらに、学習者に内在する CT 能力の高低により効果的なプランニング・ストラテジーが異なるかについて実験的に検証した。 本論文の第1章では、研究に至る背景と問題の所在、および論文の概要と構成について述べた。第2章では、アカデミック・ライティングの産出過程、ライティング・ストラテジー、および CT について先行研究をもとに定義した。そして、ライティング・ストラテジーと CT の作文産出における影響を検討した先行研究を考察し、本研究の課題を述べた。 第3章では、アウトライン・ストラテジーとフリーライティング・ストラテジーのどちらがアカデミック・ライティングの内容、構成、一貫性、および総合評価を上げるかについて実験を行った。中国人日本語上級学習者 60 名をランダムにアウトライン群、フリーライティング群、統制群に分け、論証文を書かせ、作文の質を比較した。その結果、アウトライン群は、他の群より、総合得点、内容、構成の得点が高く、フリーライティング群は他の群より一貫性の | | | |

評価が高かった。

第4章では、執筆前と文章化の段階におけるCT技能の指導と通常のアカデミック・ライティング指導の効果を比較した。日本語上級学習者レベル90名をランダムにCT指導を受ける群（CT群）、アカデミック・ライティング指導を受ける群（AW群）、指導を受けない群（統制群）に分けた。CT群とAW群はそれぞれさらに執筆前に指導を受ける群（CT1群、AW1群）と文章化の段階で指導を受ける群（CT2群、AW2群）に分け、作文を書かせた。その結果、執筆前の方が文章化の段階よりも、CT指導の方がAW指導よりも効果が高かった。

第5章では、学習者に内在するCT能力のレベル（上位レベル、中位レベル）とプランニング・ストラテジー（アウトライン・ストラテジー、フリーライティング・ストラテジー）の組み合わせによる影響を調べた。日本語学習者上級レベル96名をランダムに、アウトライン群とフリーライティング群に分けた。各群には、上位CTレベルと中位CTレベルの学習者を半々ずつランダムに振り分け、論証文を書かせた。その結果、アウトライン・ストラテジーはCT能力にかかわらず有効であったが、フリーライティングはCT能力が高い群のみで効果的であった。そして、これらの効果は内容評価のみに現れ、一貫性や構成では有意な差は見られなかった。

第6章では、以下の4点について総合考察を行い、本論文の意義を主張した。

1. アウトライン・ストラテジーは、アカデミック・ライティングの内容、構成、総合評価を向上させ、フリーライティング・ストラテジーは、一貫性の評価を高める。
2. CT認知的技能を活用するCT指導は、より高い全体的な質、内容、構成、一貫性の作成に繋がる。
3. 執筆前の段階で、指導特にCT指導をすると、より高い全体的な質、内容、構成、一貫性の作成に繋がる。
4. CT能力はアカデミック・ライティングの質の向上に有効であるが、認知的な負担を減少させるアウトライン・ストラテジーのほうがより効果的である。

本論文は、第二言語のアカデミック・ライティングにおいて、①クリティカル・シンキングが内容的に質の高い論証文を書くために重要であり、その指導を作文産出前にすることは効果が高いこと、②第二言語学習者にとって、文章化の段階の認知的負荷を下げるアウトライン・ストラテジーは文章の質を上げるために重要であることを明らかにした。本論文は、第二言語のライティングにおけるCTとライティング・ストラテジーの役割について新たな知見をもたらした点で意義深い。また、今後増加すると予想される、留学生のライティング指導における重要な教育的示唆が導出できる研究でもある。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成30年 4月 25日

